

## 令和6年度第3回柏市生涯学習推進協議会会議録

### 1 開催日時

令和7年2月19日（水）午前10時から正午

### 2 開催場所

柏市沼南庁舎5階 大会議室

### 3 出席者

（委員）

大野委員（会長）、木村委員（副会長）、新井委員、佐藤委員、須田委員、所委員、中川委員、長峰委員、並木委員、西原委員、林委員、向野委員

（事務局）

宮本生涯学習部長、生涯学習課竹内主幹、同廣瀬担当リーダー、同岡田主事、同田中主事補、同蒔抜生涯学習専門アドバイザー、同岩淵生涯学習専門アドバイザー、同岡野生涯学習専門アドバイザー、牧野中央公民館長、坂口図書館長

### 4 議題

- (1) 前回会議のふりかえり
- (2) アンケート結果について
- (3) 柏市生涯学習推進計画の骨子案について

### 5 会議概要

- (1) 前回会議のふりかえり

事務局から会議資料に沿って説明。特に意見はなかった。

- (2) アンケート結果について

事務局から会議資料に沿って説明。各委員からの意見等は以下のとおり。

（林委員）

年代別の回答割合があったが、柏市全体の人口割合との比較もほしい。

前回の調査はコロナ禍前のため、価値観や社会の変化があったと思う。そういったところを分析に入れてほしい。対面・サークルは活動が落ちている。IT化が進んだのではないか。

（所委員）

学習形態について、職場の研修が倍に増加していることから、リカレント

教育が浸透してきたのではないか。最近は日常生活でもニッチな、細かなところをネットで調べる人が増えたのではないか（生成AIが答えてくれる）。

生涯学習をしなかった理由について、「何かを学びたいと思わない」が前回結果の倍近くに増えているのは、理由を考えなくてはいけない。

資料6ページについて、選択数が異なっているので単純比較はできないが、市のHPや広報の注目度は悪くない傾向だと思う。

（向野委員）

オンラインの充実があるが、意外に数値が上がっていないのがおもしろい。どちらかというところ、バーチャルな学びでなく、リアルでの学びを求めているのかもしれない。オンライン化と同時に、リアルな学びの場はこれからも充実しなければならないと思った。

（須田委員）

通信教育は入学者が多いが、脱落者も多い。個人任せの難しさはあるが、学びの間口は広がった。オンラインとリアルの組み合わせが必要ではないか。

クロス集計の中で、40代・50代の方は「生涯学習しなかった」の割合が比較的高く、理由としては「仕事が忙しい」ことが読み取れる。一方で、リカレント教育に興味を持っている層も同じ40代・50代の方で、こうした層にオンデマンド学習のニーズがあるのではないか。ただ、個人任せの難しさがあるので、学びを継続するための工夫があればよいのではないか。

（大野会長）

リアルとオンラインの関係はおもしろい。3ページのPCスマホのオンライン講座、というところだが、今はYouTubeも講座化している。50代までの現役層と60代以上のリタイア層で、生涯学習の方向性の違いもあると思う。別々の視点で見ていく必要があると思う。

講座内容の充実について、令和元年は2位だったのに、今回は半減している。柏市として講座をやってほしいというよりは、市は情報発信・整理をすることを求められているのではないかと感じた。

### (3) 柏市生涯学習推進計画の骨子案について

事務局から会議資料に沿って説明。各委員からの意見等は以下のとおり。

（所委員）

率直な印象として、メインタイトルと副題が逆転してもよいと思った。メインタイトルが抽象的過ぎる。生涯学習としては、サブタイトルのほうが明確ではないか。

（林委員）

福祉的に感じる。学びを最初にもってきたほうが良い。若い層へのアピー

ルにこのメインタイトルで良いのか疑問がある。ラコルタ柏フェスタで地域の高校生が活躍してくれたが、若い人が教えてくれる場をどんどんつくっていくことで、若い人も、全体も盛り上がるビジョンが持てるのではないのか。

年代別の学びのニーズがあるが、知の交流といったものがタイトルに含まれていると良いのではないか。麗澤大学のオープンカレッジなども、IT系講座をやるのであれば、学生がかかわったほうがよいと思う。

(所委員)

若い世代、高齢の世代で別々の観点を持ったほうがよい、という意見があったが、サブタイトルに世代別テーマをいれるのはどうか。

(木村委員)

目指す方向性の「子どもたちが健やかに成長するように」に「少子高齢化社会」とあるが、当事者にとっては圧力に感じるので、除いてもよいのではないか。

(中川委員)

相談員の活動の基本は、学校教育・家庭教育で学べないことを活動を通して教えようとする。そうした活動も含めて、子どもたちは喜んで参加してくれている。少子高齢化に圧を感じるのは同感である。

(並木委員)

基本はこれでよいと思う。アンケートで若い世代が学びたいと感じているのに、学校教育を離れると学びを続けられない、ということは重く受け止めている。学校は今、学び方を伝えている。学びが楽しい、もっと学びたいと、いかに思わせるか、それが続けられるかが重要だと考えている。骨子案を生かした、実際の方策（パンフレット等）を充実してほしい。

(須田委員)

少子高齢化に代わる案として、多様な人々が暮らす柏市において、といった表現はどうか。

(向野委員)

はじめるきっかけについて、学校教育と生涯学習は対立的な関係にあった。でも、学校教育の時分から、地域に学びの場があるんだ、といった視点があることで、生涯学習につながるのではないかと思う。学校教育でそういった機会が持てると良い。何でも学校に押し付けるのは申し訳ないが、そういう動きも重要ではないか。

(長峰委員)

地域の餅つき大会に地元中学の相撲部の子供たちが手伝いに来てくれた。高齢者が多いので餅つきは大変だが、高齢者は工程などの知識があり、交流したり、足りないところを補い合っていた。中学生からも、最初は嫌だった

けど楽しかったという感想が聞けた。地域と学校のつながりがいつの間にかできていた。

(佐藤委員)

10代の子どもたちとかかわる場面があるが、学校・家庭以外の場がなく、でも求めている子は多い。地域で出会って、学びにつながる機会が必要だと感じる。ただ、きっかけがなく、情報も届きにくいので、盛り込む必要があると思う。

(所委員)

学校教育と生涯学習がうまくつながっていないという発言があったが、我々の世代では生きていくうえで必要なことを学ぶために生涯学習をする、というのが理由だった。でも、子どもの頃を思い返すと、上の学校に行くために勉強していた。良い点数をとるため、生きていくための学びではなかったし、期待もされていなかった。連携の仕方の中に、学校教育にも生きていくための学び、といった視点を入れてほしい。

(新井委員)

小学校のうちから余暇活動や、興味のあることにつなげる工夫をしている。家庭でも、民間のスクールに通ったり、学校に相談もある。そういう場があること、探している家庭をつなげられたらと思う。

情報提供が各取り組み方針に関わっている図式はわかりやすいと感じた。

(西原委員)

生涯学習について、県では、教育（学校教育、家庭教育、社会教育）による学習と個人の学習を合わせたものとして定義している。きっかけと情報提供がとても大切だと思う。やりたいけどできない人が多い傾向や、若い人は音楽などの趣味のこと、現役世代は仕事のこと、シニアは健康面など、時間がないけれどやらないといけないうところを実施している様子が見える。

目指す方向性の「すべての人が学べる環境に包まれるように」の具体の文章に、ICT活用も入れるとイメージしやすいのではないかな。

(並木委員)

情報提供に関して、学校現場は電子配信になっている。チラシがきても、子供は直接見られないため、親が取捨選択しており、子供につながらない。では、紙媒体の配付がよいのかというと、ハイブリッドでやらざるを得ないのではないかとも思う。やり方は授業に組み込めと言われると困る。学力向上も求められており、厳しい。情報発信についてはいろいろできると思う。

(木村委員)

おやじの会がイベントをやってくれるが、電子配信だけでは参加者がいなかったが、紙で配ったら100人の子があつまった。ポスターだと風景にな

ってしまって見ない。チラシで情報を認識する。

(須田委員)

モデル図はよく考えられている。公私が並列に書かれている。また、そのトップに「ウェルビーイングの実現（豊かな生活）」があるが、これをサブタイトルに入れるとよい。

学校・生涯学習の連携では、コミュニティスクール（CS）やふるさと協議会での議論と同じで、これらの連携を模索する必要がある。CSはまだ手探りなので、学校教育課と生涯学習課で具体案が出ると参考になる。学校教育では「探究」のことばが出てきている。全国で見ると、知床では知床学、という地域の学びをしている。「シブヤ未来科」という渋谷区の学校の取組もある。柏市に愛着を持つ子が育まれるのではないか。

(大野委員)

生涯学習については、生涯を通しての人的成長に資すること、そこから個人と地域における well-being（ウェルビーイング）の実現につなげる。

子どもから大人までライフステージに応じた学習のあり方や、民間との連携の強化、オンラインと対面型それぞれの利点を生かした多様な学習機会の確保、また、生涯を通じた学習の基礎となる「主体的な学び」が学校教育で重要視されているが、学校教育における対話教育・体験学習でその姿勢を育み、生涯学習につなげることが全体につながるのではないか。

## 6 傍聴者

なし

以上